

歩けない子の保育方法の一例

○森 英子 石原 仁美 富岡 倫子 和多 美知子

(第二白ゆり保育園)

(順正短期大学)

1、入園当初のA児の状態

A児は、平成9年3月4日生まれ、平成12年3月満3歳になった4月に福祉事務所より「年齢の低いクラスでよいから受け入れて欲しい」という要請有り。

(家庭は祖母・父母・姉1人・兄2人と本児) 嘱託医診断では、「8か月の早産で生下時の仮死による運動障害、(平成13年10月身体障害者手帳2級) 母親の言う言葉は何とか理解する」とある。

家庭での生活状況調査によると、食事はスプーンで一人で食べる。大小便はおむつ使用、着脱は一人では全くできない、人の言葉は理解できる。しかし発語は10語以下、指しゃぶり有り、移動は両手指を握りしめて床につき両足のひざとによる四つ這い移動、補助すればつま先で立つ。という状態で平成12年4月1日から入園。

2、研究目的及び研究方法

受け入れるからには、就学までには、「よりよい生活習慣が身に付き、自力で立って短距離でも上手に歩くことができれば」という願いからA児に対する保育方法を模索、研究することにした。

- (1) A児を保育者は障害児として意識しない。
- (2) 生活習慣の自立及び歩行練習に向けての保育者の連携チームを作成する。
- (3) 同年齢児のクラスの中で他児と同じ活動を経験させ行動記録を克明にとる。(根気強く必要場面を補助し温かく励まし見守りながら)
- (4) 全身、全感覚機能に揺さぶりをかけながら、満1歳～1歳3か月頃までに歩行が完成するその段階の間をA児には根気よく毎日鉄棒という補助器具を使って午前、午後の2回実施する。(他児は1回)
- (5) 毎日、登園時から降園までの歩数をグラフ化し、同年齢児と比較検討する。
- (6) 毎日、登園時の9時と15時の間食時の安静体温を測定し、グラフ化して他児と比較検討する。
- (7) 毎月1回足型を採取し検討する。・・・など

3、研究結果

入園当初から同年齢児の活動に参加出来るように保育者が常に根気よく補助してきた結果、

(1) 生活習慣の確立

一年後には、食事は箸でかなり上手に食べられるようになる。小便は身体を支えてもらうと立って男便所で出来る。(大便は一人では難しい) 着脱はちょっと手伝えば出来る。手洗い、うがい、鼻をかむ、歯磨きなどは身体を支えてもらうと一人で出来る。あいさつの言葉ははっきり言える。など生活面での進展が見られた。

二年後、友達との会話も増えて自分の気持ちを友達や先生にも伝えられるようになり、機嫌の良い時はつま先歩きで教室の端から端まで小猿が歩くような格好で歩けるようになった。

平成14年4月、いよいよ年長児組になる。食事も箸で他児同様の速度で食べられるようになり、排尿便も自立(大便は洋式便所で)。言葉もはっきりして大きな声で喋ることが出来る上に、友達の世話をやくななど生活面では問題がなくなった。

(2) 歩行

同年齢児の活動に参加出来るように保育者の適切な補助のもとで暑い夏も寒い冬も根気よく毎日大空の下戸外を歩いてきている。

遠足や自然観察などで園外に出かける時も補助して歩ける所まで歩かせ、後は避難車に乗せるなどして参加させた。毎日の歩行練習は主として次の通り、

- イ) 登園後、先ず両足と腰などをマッサージする。
- ロ) 補助されて鉄棒で逆上がり1回、連続後転100回をする。(全身の筋肉をほぐし、骨を丈夫に、そして血液の流れをよくするため)
- ハ) 補助されて運動場や園外を歩く(友達は縄跳び竹馬、ボール、一輪車などで遊んでいる間)
- ニ) 園内の階段をなるべくしっかり踵をつけて登ったり、降りたりする。
- ホ) 年長児になってからは同年齢児と共に近くの山は勿論のこと、年一回の夏の行事の蒜山キャンプにも参加して、大山隠岐国立公園二俣山山頂、1080mに二人の保育者の補助で元気に登って下山することができた。そしてこの山登りの経験で自信を得たのか歩くことだけでなく、他領域へも意

欲を示すようになった。

- へ) 10月の運動会には、他児と同じように縄を持って歩き(他児は走る)ながら、時々自分で縄を回しては、縄を越えて進むことも出来た。リレーでは4分の1周ではあったが一人で歩き次のランナーにバトンを渡すこともできた。

補助付き自転車にも一人で乗って自転車パレードにも参加できた。

- ト) 日本太鼓の演技の時は、ひざ立ちで元気にバチで太鼓を叩き、大きな声でのかけ声も出た。
- チ) 12月の自然観察の発表会には、他児よりも元気な大きい声で発表することができた。
- リ) 1月に入り鉄棒での連続後転が補助なしで100回以上自力で回れるようになり、背筋も一段と伸びて姿勢が良くなってきた。
- ヌ) 又、10月後半頃から土曜日の午前9時から12時までの3時間、岡山駅西口から地下道を通って高島屋百貨店に入り、8階まで階段を登って降りて再び駅西口に戻るというコース(往復約1km+階段251段の登り降り)を床に踵をしっかりとつけて歩くことに重点をおいて実施してきている。(片手の補助で)

(3) 体温と歩数

平成12年度に入ってから、

- イ) 毎朝9時(登園時)の安静時体温を保護者に検診台の前で計ってもらい保育者が記録する。
- ロ) 午後3時の安静体温(間食時の椅子に腰かけた状態)を保育者が測定し記録する。
- ハ) 万歩計を登園時につけて帰る時にはずして一日の歩数を記録する。(記録方法は午前中の歩数と午後の歩数そして一日合計歩数の3段階)
- 二) 以上、イ)ロ)ハ)をグラフ化して、月毎に検討を加える。
- ホ) 二)のA児の個人記録と他児の個人記録を比較検討を加え、よりよい保育方法を探る。

以上の結果、A児について現在までにわかったことは、

- ・15時体温は入園当初から現在に至るまでの3年間36.8℃~37.3℃と余り変動は見られない。
- ・変動の大きいのは「朝の体温」で、入園当初の平成12年には、4月から6月までの月平均が35℃台だったA児が7月以降は36.0℃~36.3℃と上昇し、平成13年9月以降は36.4℃、平成14年2月から4月には36.7℃に上昇、年長児の5月から現在までは毎月の平均体温の波も安定して37℃~37.2℃。と

なった。

・日々の朝体温を綿密に検討すると毎日の歩数が体温に大きく影響している結果が顕著に見られた。歩数が殆ど出なかった平成12年度から平成13年度9月頃までは毎日の体温変動の波がとても大きく平成14年に入り歩数平均が5000歩から時々1万歩を越えるようになると「朝体温」も安定した37℃~37.2℃のさざ波に変動してきた。

- ・同年齢の活動の中でA児も同じように活動してきた結果、「朝体温」は極めて顕著に上昇カーブを描き続けてきている。
- ・しかし、同年齢児の平成14年度の平均体温及び平均歩数と比較すると、同年齢児の歩数が毎日1万歩以上で朝体温が平均36.7℃~36.9℃に比べてA児は5~6千歩で朝体温が37℃~37.2℃と少し高い。他児にかなり近付いてはきているが、今後の歩数並びに歩き方に尚一層の研究が必要となる。

(4) 足型

入園当初は保育者がA児の足の甲をかなり強く押さえて足型を採取していたが、一年を経た頃からは身体を支えるだけで採取出来るようになった。そして歩数が増えるにしたがって、月毎に足裏全体が大きくなっていくと同時に踵に膨らみが徐々に出てきて、アーチもはっきりしてきた。現在では同年齢児と変わらないまでになってきている。

4. まとめ

以上のように四つ這い状態で全く歩くことのなかったA児を追って模索の3年を過ごしてきた結果、A児を通して「オギャー」の産声から就学前児までの乳幼児期の大切な発達過程の一コマコマをあらためて見つめ直すことが出来た。

A児は健康児が瞬間、瞬間に脱皮していく一コマコマをスローモーション画像で行きつ戻りつするような状態で何日も何日もかかって脱皮していく。その為には0歳児から就学前児までのいる集団(保育園という)の力がとても大切な原動力となっていること。そしてその上に毎日の繰り返しの粘り強い補助と励ましが、「やる気」を触発させ「できた!」という感動と喜びを味あわせることになっていることを痛感した。今後より細密な観察と研究を続けていきたい。